

キラリ「農業女子」



「農業女子」という言葉を聞いたことはありませんか。農業という「男性中心の力仕事」というイメージがあるかもしれませんが、しかし近年、農業における女性の存在感が増し、その活躍が期待されています。今回は市内で農業に携わる女性に話を聞きました。

農業者の約半数が女性

農林水産省の調査によると、農業就業人口に占める女性の割合は約半数。女性が経営に関与していると、収益性が高い傾向が見られるなど、農業の担い手として重要な役割を果たしています。昨年度の全国における女性の認定農業者（農業経営改善計画の認定を受けた農業経営者）は、共同申請ができるようになった平成15年から約3倍に増加しています。

女性が働きやすい環境づくりを

平成25年、農林水産省は「農業女子プロジェクト」を開始しました。府においては平成28年に「京の農林女子ネットワーク」が発足。農業をする女性同士のネットワークづくりや働きやすい環境づくり、若手女性の新規就農の推進などに取り組んでいます。企業も参加したプロジェクトでは女性の意見を生かし、軽量の農機具やファッション性の高い作業着が開発されるなど、農業女子を取り巻く環境は変化しつつあります。

何事にも好奇心で取り組む



杉本好美さん（故屋岡町）

農地守るため農業者に

夫の実家の農地を引き継ぎ、昭和55年ごろから農業を始めた杉本さん。自身の実家も農家で大変さを痛感していたため、農業に対してあまり良いイメージはなかったとか。「ただ、夫の両親が大切にしてきた農地を守りたいとの思いで引き継ぐことを決めた」と言います。

両親はキャベツやエンドウマメなど園芸作物の農家。「夫は動機に出ながらだったので、手がいる園芸から、稲作とウシの飼養に変えました」と杉本さん。自然や生き物相手の仕事は苦勞が多いながらも「作物を取獲したときの喜びやウシの出産に立ち会ったときの感動は、何ごとにも代えがたい」と目を細めます。

市内初の「女性農業士」

当時はまだ、女性が表立って農業経営に取り組むことが少なかった時代。杉本さんは「女性だからという理由で苦勞したことはない。頑張っていたら自然と周りに認めていたように思う」と言います。平成4年に市内初の女性農業士（※）の認定を受け、翌年には女性で初めて、綾部市農業委員となりました。「好奇心でやってきた。社会に出て多くの人と活動でき、自分自身も成長させてもらえた」と話し「女性も自分の意見をどんどん出せば形になり、農業や経営の楽しさが見えてくる。楽しんで働いてほしい」と若手の女性農業者にエールを送りました。

※地域農業の振興に貢献する農業者のリーダー。現在は「認定農業士」で、性別の区分がなくなりました。



わらなどはウシのエサに、ふんは堆肥にして資源を循環



たてまつ 立松季久江さん（上原町）

農業は夢の実現のための第一歩

立松さんは平成24年、都市部から綾部市に移住。現在は、農業や肥料などを一切使わずに育てた野菜の販売、農業体験イベントの開催、食生活改善セミナーなどを行っています。「初めは農業に興味があったわけではなかった」と言う立松さん。学生時代に独学で食を学び、減量に成功した経験から「食で体が変わる」と実感。栄養士になり、食品会社に就職しました。

しかし、食の大切さを伝えたいという思いと、仕事で作る食品とのギャップに悩み退職。友人に誘われた綾部での農業体験で、農業などを使わず自然に近い方法で作る「本来の食」に共感しました。「自分で食

農業体験通じた食育を

「今後は野菜の生産販売だけでなく、本来の食で体が変わるということをもっと伝えていきたい」と言う立松さん。最近では、農業体験を通じた子どもの食育や企業研修などの機会も増えているそうです。「綾部で無農薬野菜の生産を進め、仲間を増やしていきたい。自然の中で仕事することを選ぶ人も増えてきている今、食を通して移住や地域活性化にもつながれば」と語りました。

「食」で体が変わることを伝えたい



クラウドファンディングで資金を集め、市内のこども園等にニンジンを提供するなどの活動も

農業女子のつながりで地域活性化



農に関わるさまざまな人で集まる

綾部市、福知山市、舞鶴市の一次産業に携わる女性らでつくる「のら×たん ゆらジェンヌ」(居相雅代・代表)。気軽に集まって話せる機会があればと、メンバーの赤堀さんが声を掛け、令和2年2月に設立しました。グループの活動には農業女子だけでなく、加工者▽水産業者▽農協職員▽行政職員も携わっています。メンバー共同で勉強会をしたり、販売会を開いたりするなど、活発に活動しています。「販売会の開催に詳しいメンバーのおかげで、直接販売する機会が持てた」「悩みも喜びも共有できる。困ったときはアドバイスをもらえて心強い」と一同が口をそろえます。

農業に女性の強み生かす

農業分野での女性ならではの強みは「消費者は主婦が多い。主婦目線で買いたいと思ってもらえる商品づくりや宣伝ができる。農業は性別にかかわらず、自分が得意なことを発揮できる仕事」と話すメンバー。

のら×たん ゆらジェンヌ

写真右から

- 赤堀 幸さん (西坂町)
- 福井 泰子さん (位田町)
- 居相 雅代さん (小貝町)
- 森嶋 麻衣さん (西坂町)
- 高橋 恵美さん (西坂町)

「農業に携わる女性がさらに輝けるように、農業って楽しそう!と多くの人に思ってもらえるように、私たちが積極的にPRしていきたい」と言います。

地域リーダーとしての側面も

のら×たん ゆらジェンヌは、女性農業者のつながり作りだけではなく、女性リーダーとして地域を引っ張り、男女共同参画社会の推進や地域活性化の一助になればとの思いで活動しています。今後について「食育やSDGsにも力を入れていきたい」と話す居相代表。メンバーは本年、学校や地域等で農作物の栽培や加工・調理などの食農体験指導ができる「きょうと食いく先生」の認定を受けました。ゆらジェンヌたちの活躍の場は、今後ますます広がります。



現在、メンバーは正規会員13人、準会員12人。会員を随時募集しています

学び×実習で知識深める



西山塔子さん (上延町)

祖父の手伝いが農業への入り口

畑で野菜を作っていた祖父を手伝いたいと思ったことがきっかけで、農業に関心を持ったという西山さ

ん。府立綾部高等学校由良川キャンパスの、農業科野菜専攻のコースに進学しました。授業では野菜の育て方だけではなく、野菜の特性や原産地など多くのことを学んでいます。西山さんは「難しい授業もあるけれど、実習が楽しい。育った野菜を収穫するときにやりがいを感じる」と笑顔です。

現在、高校生活の集大成である「課題研究」の真っただ中。ナスの育て方の違いによって、重量や収量がどう違ってくるかなどを研究して



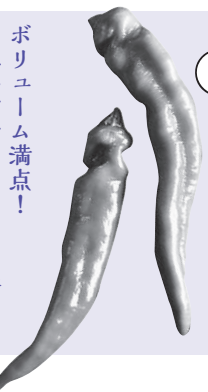
同校では収穫祭や東祭、即売会など特色あるイベントを開催。自分たちで収穫した野菜を売る楽しさも感じるそう

いるそうです。「まずは課題研究をまとめて、しっかりと発表できるように頑張りたい。卒業までにさらに学びを深め、野菜専攻の知識を高めます」と意欲を語りました。

農業は「毎日休みなく、早朝から働かなくてはいけない」「力仕事で大変そう」というイメージはありませんか。しかし、取材する中で「自分で作業時間をやりくりできる」「メリハリをつけて、趣味の時間は思いつきり楽しむ」「子どもにも働いている姿を見せられる」「今は機械化が進み、女性も働きやすくなった」という声がありました。農業の魅力を探ると「自分たちが作ったものを、おいしいと言ってもらえることが何よりもうれしい」と皆さん口をそろえます。コロナ禍で田園回帰の流れが加速し、食の安全に関心が高まる今、農業は女性にとって魅力的な職業の選択肢の一つなのではないでしょうか。



農家に聞く!
おいしい
レシピ帖



ポリウム満点! 万願寺甘とうの肉巻き

- 1 万願寺甘とうを軽く洗い、水気を切る
- 2 豚バラ肉を万願寺甘とうに巻く
※肉がはがれるときは、つまようじで止める
- 3 塩・こしょうを振りかける
フライパンにごま油をひき、こながら焼く

新米と相性ばっちり! 紫ずきんごはん

- 〔材料〕
- 米……………2合
 - 紫ずきん…正味200g
 - 塩……………小さじ1と1/2
 - 酒……………大さじ1/2
- ※好みの量で調整してください

- 1 米を研ぎ、水に30分ほど浸す
- 2 紫ずきんはさやから出し、軽く水洗いして甘皮を取る
- 3 米と2、塩、水を炊飯器に入れ、やさしくかき混ぜた後、通常どおり炊く
- 4 炊きあがったらしばらく蒸らし、さっくり混ぜる

お茶の淹れ方のポイント



- ①よく沸騰させたお湯を使う
沸騰状態を5分程度続け、カルキ臭を抜きましょう。その後、茶の種類によって最適な温度まで冷まします。
- ②湯を注いだ後は、ゆすらない
早く飲みたいからと急須をゆすると、雑味や苦みがでます。じっくり待ちましょう。